

良き有権者としての決意表明

東臼杵支会代表 甲斐 依歩

「若者の選挙離れ」という言葉を、選挙のたびに必ずといってよいほど耳にします。私自身も自分宛に届いた投票案内のハガキを手にして、「何千万と票がある中で、私の一票が何の役に立つのか」と感じたことがありました。同じような経験のある方が、おそらくこの会場にもたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。政治とは何か、私たちは何のために投票をするのか、政治は誰のものなのか。そう考える中で私は、「良き政治家を求めるならば、まずは私自身が良き有権者であるべき」と考えるようになりました。

私が考える良き有権者とは、政治に対し自分自身の意見を持つこと、そして選んだ政治家が力を尽くせるような土壌を、私たち自身でつくることです。

経営学の概念で、「フォロワーシップ」という言葉があります。これはカーネギーメロン大学のロバート・ケリー教授が、1992年に著書『The Power of Followership』の中で提唱したもので、経営において部下が上司を支える力のことです。ケリーは著者の中で、組織を成功へ導く鍵は強いリーダーシップではなく、フォロワーシップ、すなわちリーダーを正しく支え導く部下の存在であると説きました。具体的には、上司の掲げる指針や策に対し、部下として良識的に問題を提起し、組織のために率先して行動することです。フォロワーが正しく機能して初めて、リーダーが本来の力を十分に発揮し、結果として組織は目標達成に近づけることができる、ケリーはそう説いたのです。

この考え方は、リーダーを政治家、フォロワーを有権者に当てはめると、政治のあり方にも通じると思います。良き政治を求めるのであれば、私たちも有権者としての役割を正しく理解し果たす必要があります。

今の政治に対する国民の向き合い方はどうでしょうか。メディアでは日々、政治家や政権の批判が多く取り沙汰されています。日本の行く末を語る場面では、少子高齢化によって社会が抱える困難ばかりがクローズアップされ、明るい未来を語る声はかき消されているようです。それを観る私たちも、政治家ばかりに責任を問い、今の政治のあり方を選んだ有権者としての責任には目をつぶっているのではないのでしょうか。投票はあくまで意志を示すための手段に過ぎません。重要なのは一票を投じた責任をどのように果たすのか、というところです。

恥ずかしながら私自身も、国民の役割は選挙に行くことだけで、あとは選挙で選ばれた政治家が国をなんとかしてくれる、そう誤解していました。自分が選んだリーダーをどのように支えついて行くのか、という視点が欠けていたのです。確かに、これまでの人生を振り返ると、様々な集団の中で、良きリーダーになる

ことを求められる機会は多くありましたが、良きフォロワーである事の重要性を教わる機会はほとんど無かったように感じます。リーダーの導く力ばかりに期待をし、責任を果たさない人々が、外野から結果だけを見て声高にリーダー批判をする。政治に関する報道でよく目にする構図ではないでしょうか。現代の若者が抱く無力感や政治に対する期待値の低さは、そういったネガティブで無責任な世論のあり方が生んだ結果ではないかと感じます。「投票に行ってもなにも変わらない」と淡々と語る若者も、過去に自分の一票の価値を疑った私と同じく、自分自身が果たすべき役割に気が付いていないのです。日本の未来を担う若者や子供たちには是非、フォロワーシップという視点を備えてほしいと思います。

また、未来のリーダーを育てることも、有権者が果たすべき大切な役割であると思います。どんなに素晴らしい才能を持った政治家も、生まれたときからリーダーであった訳ではありません。最初は私たちと同じ国民の中から選ばれたのです。良き政治家としての素質は、国民として育つ中で養われているはずなのです。そのためにも、私が最も重要であると思うことは、私たちひとりひとりが、日頃から日本の未来がどうあってほしいか希望を持って思い描き、世代を超えて語り合うことです。そして、政治に対して前向きに、高い意識を持った良き有権者になって行くことです。

最後に、この場を借りて決意表明をさせていただきます。私は、いついかなるときも、良き有権者として希望にあふれた一票を投じられる国民である事を誓います。